

衣服の色彩選好に関する研究

小原 怜子

(武庫川女子大学家政学部被服学科)

Studies on Women's Preferences of Clothing Colors

Reiko Ohara

Department of Textile and Clothing Sciences, Faculty of Home Economics,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

The aim of this paper is to analyze the overcoat colors chosen by young women from 1987 to 1992. The writer concludes that in these six years young women chose black, dark gray, medium gray, greyish yellow or dark blue while violet, blue green and green were not chosen. The rate of choice of achromatic colors from 1987 to 1990 shows more than 50 percent. However, it has decreased since 1991 although the rate for chromatic color has been increasing.

緒 言

服装における色彩は、衣服を選ぶ時の重要な選択理由の一つであり服飾品に要求される心理的な要因のうちでも要求度の高い審美的な条件である。本研究では1987年から1992年に実際に若い女性が購入し、着用している冬期のコートについて観察調査の上、その結果について色彩の傾向と各年度による差異を検討したものである。

方 法

調査は1987年から1992年の12月と1月に実施した。コートの色を観察し調査色票中の近似した記号を記録したもので、1987年は404名、1988年は363名、1989年は295名、1990年は355名、1991年は318名、1992年は334名である。

調査色票は服装の色彩調査のために設計された専用調査色票²⁾を用いた。その構成はOstwald色体系に準拠し有彩色372色、無彩色10色、計382色である。

結果および考察

各年におけるコート色の分布について考察する為に、出現度数を個別、色別、色相別、トーン別、年度別に集計整理し、以下の項目について考察した。

1. コート色の分布特性

コート色の分布特性を見るために、1色当りの出現度数級別に該当色数を算出し相加的平均と標準偏差を求め、1色当りの出現度数が $\bar{x} + \sigma$ を超えた範囲に分布する色を示したものがTable 1である。各年において出現度数の高い順に主な色名を記すと、1987年では黒(p)、暗い灰(n)、暗い灰(l)、灰(i)、灰(g)、白(・・)、暗い灰がかった青(13½ni)。1988年では黒(p)、暗い灰(n)、暗い灰(l)、白(・・)、灰(i)、灰(g)、暗い青(13½pn)、灰がかった黄(2ig)。1989年では黒(p)、暗い青(13½pn)、灰がかった黄(2ig)、暗い灰(l)、白(・・)。1990年では黒(p)、暗い灰(l)、暗い灰みの黄橙(4ni)、灰がかった黄(2ig)、暗い青(13½pn)、灰(i)、濃い青

(13½pg), 暗い灰みの橙 (5ni). 1991年では黒 (p), 灰みの黄 (2ig), 白(・), 灰みの橙かかった黄 (3ig), 明るい灰 (e), 白 (a), 灰みの黄橙 (4ig), 明るい灰みの黄緑みの黄 (1gc), 濃い紫みの青 (13pg). 1992年では黒 (p), 灰がかかった黄 (2ig), 暗い灰みの黄橙 (4ni), 暗い青 (13½pn), 白(・), 暗い黄橙 (4pn), 白 (a), 灰 (i), 暗い灰みの橙 (5ni), にぶい黄橙 (4le), 濃い黄橙 (4pg), 暗い灰みの橙黄 (3ni), にぶい橙がかかった黄 (3le). となり, 6年間を通じて上位に出現しているのは黒, 暗い灰, 灰などの無彩色が多く, 次いで青, 黄の色群が好まれている. 1987年~1990年の4年間は無彩色が半数以上を占めているが, 1991年から1992年にかけて無彩色が減少し有彩色が多く出現し始めている.

Table 1. The ranking of overcoat color preference from 1987 to 1992

1987	p, n, l, i, g, .., 13½ni
1988	p, n, l, .., i, g, 13½pn, 2ig
1989	p, 13½pn, 2ig, l, ..
1990	p, l, 4ni, 2ig, 13½pn, i, 13½pg, 5ni
1991	p, 2ig, .., 3ig, e, a, 4ig, 1gc, 13pg
1992	p, 2ig, 4ni, 13½pn, .., 4pn, a, i, 5ni, 4le, 4pg, 3ni, 3le

2. 色群別分布の年度差

各色相別の出現度数と構成比を求め, これを黄, 橙, 赤, 紫, 青, 青緑, 緑, 黄緑の8色群に分類したものを Table 2 に示す. これより, それぞれの色群における出現率と年度差について χ^2 検定を行った結果, 赤, 紫, 緑, 黄緑, の色群においては出現率と年度差の間には有意差は認められなかったが, その他の4色群すなわち黄 (12, 87), 橙 (43, 66), 青 (14, 35), 青緑 (17, 35) においては有意水準 2.5% で, 出現率と年度差の間には有意差が認められた.

Table 2. Distribution of hues on overcoat colors from 1987 to 1992

		1987		1988		1989		1990		1991		1992	
		fre- quency	per- centage										
yellow	1 1½ 2 3	30	7.5	36	9.8	42	14.3	38	10.6	58	18.3	52	15.6
orange	4 5 6	22	5.5	25	6.9	22	7.4	36	10.2	39	12.3	68	20.3
red	6½ 7 7½ 8 9	10	2.4	11	3.1	16	5.5	27	7.5	23	7.2	20	6.0
violet	10 11 12 12½	9	2.2	4	1.1	1	0.3	8	2.3	6	1.9	3	0.9
blue	13 13½ 14 15	29	7.3	29	8.0	45	15.2	57	16.1	37	11.6	43	12.9
blue green	16 17 18	2	0.5	1	0.3	0	0	2	0.6	5	1.6	9	2.7
green	19 20 21	1	0.3	3	0.9	2	0.6	2	0.6	4	1.3	7	2.1
yellow green	22 23 24 24½	6	1.2	2	0.6	4	1.4	4	1.1	12	3.7	10	3.0
chromatic color		109	27.0	111	30.6	132	44.7	174	49.0	184	57.9	212	63.5
achromatic color		295	73.0	252	69.4	163	55.3	181	51.0	134	42.1	122	36.5
total		404	100.0	363	100.0	295	100.0	355	100.0	318	100.0	334	100.0

衣服の色彩選好に関する研究

3. トーン別分布の年度差

各年度別に有彩色のトーン別の出現度数ならびに構成比を整理して Table 3 を得た。この表により有彩色の数値の分布を Ostwald 色体系の色相平面において観察すると、この6年間の資料では各年を通して明度の低いトーンに多く分布しているが、1990年からは明度の高いトーンが増加する傾向がみられる。そこで、これらを Table 4 のように3区分して年度別、トーン別の分類表により χ^2 検定を行った。(表中の括弧内の数字は数値の分布に有意差がないと仮定した時の理論度数を示す。)その結果、検定統計量 12,67 となりトーン別と年度別の分布の間には有意差は認められなかった。

Table 3. Distribution of tones on overcoat colors from 1987 to 1992

tone	1987		1988		1989		1990		1991		1992	
	fre-quency	per-centage										
pale ba 11	2	0.5	2	0.6	1	0.3	0	0	1	0.3	5	1.5
pale ca 12	2	0.5	1	0.3	2	0.7	0	0	1	0.3	0	0
light ea 13	2	0.5	1	0.3	2	0.7	0	0	4	1.3	0	0
bright ia 01	0	0	2	0.6	0	0	6	1.7	4	1.3	2	0.6
vivid pa 02	3	0.7	4	1.1	10	3.4	10	2.8	3	0.9	4	1.2
cb 4002	0	0	1	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0
light greyish dc	0	0	2	0.6	1	0.3	0	0	4	1.3	4	1.2
light greyish ec 4003	1	0.2	0	0	0	0	2	0.6	1	0.3	0	0
light greyish gc 03	1	0.2	1	0.3	9	3.0	4	1.1	10	3.1	13	3.9
strong nc 04	4	1.0	8	2.2	0	0	7	2.0	10	3.1	5	1.5
dull le 05	6	1.5	8	2.2	3	1.0	15	4.2	5	1.6	24	7.2
greyish ig 06	21	5.2	19	5.2	24	8.1	22	6.2	48	15.1	47	14.0
deep pg 07	21	5.2	16	4.4	17	5.8	29	8.2	37	11.7	21	6.3
dark greyish ni 08	24	6.0	16	4.4	12	4.1	47	13.2	34	10.7	43	12.9
dark pn 09	22	5.5	30	8.1	51	17.3	32	9.0	22	6.9	44	13.2
chromatic color	109	27.0	111	30.6	132	44.	174	49.0	184	57.9	212	63.5
achromatic color	295	73.0	252	69.4	163	55.3	181	51.0	134	42.1	122	36.5
total	404	100.0	363	100.0	295	100.0	355	100.0	318	100.0	334	100.0

Table 4. Tones of overcoat colors from 1987 to 1992

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	total
high lightness (ba,ca,ea,ia,cb,dc,gc,ec)	8(11.11)	10(11.31)	15(13.45)	12(17.73)	25(18.75)	24(21.61)	94
midium lightness (pa,nc,le,ig)	34(36.64)	39(37.32)	37(44.38)	54(58.50)	66(61.86)	80(71.27)	310
low lightness (pg,ni,pn)	67(61.23)	62(62.36)	80(74.16)	108(97.75)	93(103.37)	108(119.10)	518
total	109	111	132	174	184	212	922

4. 無彩色の明度分布別の年度差

無彩色に対する明度別分布について出現度数と構成比を整理したものが Table 5 である。これらを各年度について観察すると、何れの年も黒と灰色に多く分布している事が認められる。1987年, 1988年, 1989年は特に多く出現し1990年から減少傾向が見られる。そこで、これを白と灰色と黒とに3区分して各年度別出現度数を配分し Table 6 を得た。これらより無彩色の分布について χ^2 検定を行った結果、検定統計量 109,66 となり、無彩色における明度別と年度別との間に有意差が認められた。

次に、無彩色の中の灰色について観察すると、1987年, 1988年, 1990年は dark grey が多く、1992年は medium grey が多く分布している。これを Table 7 のように3つに区分し、各年度の差について χ^2 検定検定を行った結果検定統計量 31,48 を得た。これで灰色における明度別と年度別との間には 2.5% 水準での有意差がある事が確かめられた。

Table 5. Distribution of tones on overcoat colors from 1987 to 1992 (achromatic color)

	1987		1988		1989		1990		1991		1992	
	fre-quency	per-centage										
white	13	3.2	25	6.9	10	3.4	6	1.7	15	4.7	11	3.3
white a	4	1.0	6	1.6	2	0.7	6	1.7	6	1.9	9	2.7
light grey b	1	0.2	1	0.3	1	0.3	2	0.6	0	0	0	0
light grey c	1	0.2	3	0.8	1	0.3	1	0.3	2	0.6	5	1.5
light grey e	8	2.0	7	1.9	2	0.7	0	0	6	1.9	0	0
midium grey g	15	3.7	13	3.6	1	0.3	5	1.4	1	0.3	2	0.6
midium grey i	35	8.7	22	6.1	4	1.4	10	2.8	2	0.6	9	2.7
dark grey j	36	8.9	25	6.9	10	3.4	27	7.6	5	1.6	2	0.6
dark grey n	44	10.9	31	8.5	7	2.4	4	1.1	5	1.6	3	0.9
black p	138	34.2	119	32.8	125	42.4	120	33.8	92	28.9	81	24.2
total	295	73.0	252	69.4	163	55.3	181	51.0	134	42.1	122	36.5

Table 6. Lightness of overcoat colors from 1987 to 1992 (achromatic color)

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	total
white	17 (29.06)	31 (24.82)	12 (16.05)	12 (17.83)	21 (33.49)	20 (12.01)	113
grey	140 (92.33)	102 (78.87)	26 (51.01)	49 (56.65)	21 (41.94)	21 (38.18)	359
black	138 (173.60)	119 (148.29)	125 (95.92)	120 (106.51)	92 (78.85)	81 (71.79)	675
total	295	252	163	181	134	122	1147

Table 7. Lightness of overcoat colors from 1987 to 1992 (grey)

	1987	1988	1989	1990	1991	1992	total
light grey	10 (15.98)	11 (11.64)	4 (2.96)	3 (5.59)	8 (2.39)	5 (2.39)	41
midium grey	50 (46.40)	35 (33.81)	5 (8.61)	15 (16.24)	3 (6.96)	11 (6.96)	119
dark grey	80 (77.60)	56 (56.54)	17 (14.41)	31 (27.16)	10 (11.64)	5 (11.64)	199
total	140	102	26	49	21	21	359

総 括

1987年から1992年までの6年間に若い女性が着用しているコートの色について調査し、色の分布特性、色群別分布の年度差、有彩色のトーン別分布の年度差、無彩色の明度別分布の年度差について考察した。

- 〈1〉 各年度数において上位に出現している色は黒、暗い灰、灰、灰みの黄、暗い青であったが、紫、黄緑、緑などの色群の出現は微少である。また6年間を通して無彩色が多く出現しており、特に黒は各年共常に最高嗜好色となっている。
- 〈2〉 色群別分布については、8色群中、黄、橙、青、青緑の4色群については出現率と年度差の間に有意差が認められたが、赤、紫、緑、黄緑の4色群では有意差は認められなかった。
- 〈3〉 有彩色のトーン別については、年度別分布とトーン別分布との間には顕著な有意差は認められなかった。
- 〈4〉 無彩色については、1990年までは逐次減少の傾向を示しながらも過半数を維持していたが、1991年には50%を割りその後は有彩色が増加し始める傾向を示している。

参考文献

- 1) 吉川富三：繊維工学，20-4 218-223(1967)
- 2) 林 泰子：武庫川女子大紀要 19 13-21(1971)
- 3) 蔵田怜子：武庫川女子大紀要 26 147-152(1978)